

●葦書房

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号
電話〇九二(七六)二八九五
(一九九三年九月十日発行)

別冊
満洲文藝年鑑

回想

満洲文芸年鑑の頃	……青木 實	(2)
「渦中の人」と「旅人」	秋原 勝二	(6)
満洲の回想あれこれ	……大谷 武男	(9)
満洲文学の一部分	……本家 勇	(13)
解題	……西原 和海	(15)
総目次	……西原和海編	(26)
索引	……西原和海編	(38)

満洲文芸年鑑の頃

青木 實

文化の温床より

長春が国都と定まり、昼夜兼行の突貫工事で、大同大街が拓け、関東軍の黒いいらかの大庁舎が、満洲国國務院が、あつという間に完成していったが、旧満鉄附属地であつた吉野町の盛り場は、雨が降ると、泥んこ道で徒らに一杯呑み屋が殖えていった。

その中から、後に『モダン満洲』（月刊読物誌）。時局の進展で『国民画報』（同社名）と同時に、北村謙次郎を始め多くの単行本を発行した奥一氏が首都として初めて創刊の『高粱』という同人雑誌を携えて大連にのりこんできた。敗戦後、奥氏は京都の夕刊紙の東京支局長となり、専ら趣味とするサポテンの文献的研究に従い、『サポテン日本』を創刊、その協会を結成、研究成果を限定版の著書とし、その種類十冊近くに及んだ。そして再会の日も与えず、あの世にさきだったのは、上京十数

城島舟礼の『月刊撫順』が新京にのりこんで『月刊満洲』。大連には『満蒙』、『新天地』、『満洲公論』『満蒙評論』、『大陸』、週刊『満洲評論』、『女性満洲』などがあつたが、首都に進出したものはなかった。

本家勇は、大連西広場の勤め先に居住して文学書に埋もれていたが大連詩書倶楽部名で、年刊『塞外詩集』——三集の他、逐刊物が仲々認可にならないので、『広場』『東方』などの四六倍判の一回限りの詩誌を発刊したり、手元に集まった詩集百数十冊を大連図書館に一括寄贈したりしていた。

たしか昭和十一年晩春であつたか、本家に呼ばれて行った。

彼の言によれば、毎年小遣銭が壹百円のこる。これを寄金にして、一年間の詩、小説、評論、戯曲中の最優秀作に奨励金として賞を贈る使い道を考えて欲しい、というのであつた。

条件は、選人選は一任。自分の個人名は一切公開しない。細部の一切を青木に一任する。

私はもし本家さん以外の人からだったら、誰に頼まれてもこんな役は引受けなかつたであろう。私は即座に、

年の末であつた。『高粱』は、ページ組の締めが十分でないらしく、活字の各個が踊っていて、大内氏の記す所によれば昭和七年九月が創刊であつた。記憶に残っているような作品があつたか、どうか。もう一つ記録的なことを書き残しておく、同氏が出版した大内隆雄（山口慎二）著『満洲文学二十年』を持ち帰り、記録として、上野図書館に寄託した。北村謙次郎著『北辺慕情記』（大学書房刊）は、本書を種本としているので、大内著の範囲から多く出ていないし、大内著自体が、自分の興味あるものを中心に、たまたま入手、寄贈をうけた図書、雑誌の範囲の知識以上には出ていない。

奥氏を迎えた当時の大連では、大連図書館員の竹内正一、大谷武男の諸氏を中心に四六判の『線』という同人小誌と、隔月刊『作文』が創刊当時（昭和七年八月）でまだ満洲事変前夜のことであつた。『作文』認可以前、小生が『御冬』、『彩』、島田幸二君が『山』一、二号、何れも薄い単行本に、後に『作文』同人になった人たちに寄稿して貰つたりしていた。即ち、百田宗治の『椎の木』同人だつた、本家勇（筆名・城小確）、安達義信、小杉茂樹に、落合郁郎、高木恭造などであつた。

出資者を絶対に口外しないこと。寄金は毎年その年内に用意すること。少なくとも発表したら、最小でも五年間は続行すること……。などの快諾を求め、なお一日の考慮期間を要求した。

第一に、本家氏は何も意見を出さないから私一人の独断に陥る心配がある。両人は、出資者を口外しない信頼出来る人を各一人ずつもつこと。

第二に、受賞作品は、『作文』誌上に公開すること。ただしこの件は、『作文』の私物化、宣伝にとられる怖れがあるので、日本文芸家協会の『文芸年鑑』が、当該年の諸記録と各種名簿に限られているのに対し、本年鑑は受賞作品を中心として候補作品も合わせ掲載する作品年鑑とすること。

賞名をG氏文学賞と架空の文学的名称とすること。選定委員を左記十名とし、中途欠員を生じた場合は補充すること。

青木実（作文）、大内隆雄（新京日日新聞学芸部）、落合郁郎（作文）詩人、近東綺十郎（哈爾濱日日新聞社）、小杉茂樹（作文）詩人、城小確（大連詩書倶楽部）、平田滋（奉天新聞編集長）、福家富士夫（医科）満洲医大文

学代表)、八木橋雄次郎(「鵲」詩人)、横沢宏(満洲日日新聞学芸部長)以上十名。賞品の銀時計は、税不用の大連では五十円で相当なものが入手できるので、半金は作品年鑑製作用に当てることとした。不足金は年鑑売上金から充当した。

G氏文学賞のこと

G氏文学賞 第一回受賞 昭和十二年
第一詩集「麦の花」 小杉 茂 樹
第二回受賞 昭和十三年
小説「手記」 吉野 治 夫
第三回受賞 昭和十四年
短編小説集「氷花」 竹内 正 一

満洲事変の進展と同時に物価上昇気運にて、頭初無償にてある程度頒布できる筈だった第一回年鑑も有償頒布となり、掲載予定の大谷健夫の長編「人形のやうな女」も割愛のやむなきに至り、その上折柄発足をみる満洲文話会への資金も出来なくなつた。

一方昭和十三年には、満洲文話会が発足し、満鉄衛生研究所長、医学博士 紫藤貞一郎氏を会長として、当局

の設立認可を受けていた。

昭和十二年六月三十日、この日を期して満洲文話会創立大会が、大連満鉄社員クラブにて行われ全満各地の文人を吸集して、その第一歩を踏み出すため紫藤博士を中心として橋本八五郎他十一名の発起人の呼びかけで、集合した。

新京より事務局員として今村栄治も着任、大連市伊勢町鈴鹿ビルの一室にて『満洲文話会報』第一号を発刊、解散まで一回の休刊もなく、全満各省の各市街に支部ができ、戦局拡大の一途を辿る中で、文化的なものに飢えている人たちによって燎原の火のように会員が拡大されてゆくのであった。

満洲文話会の発足

て、同紙学芸欄の企画、自身の執筆、竝に外部への執筆依頼に当って顔の広かつた吉野治夫君が、選出されたのであった。

文話会版と創元社版

吉野君は着々として新京進出の準備を進めている。文学賞にしろ、作品年鑑にしろ、『作文』ごときが中心になるべきではない。満洲文話会という公的一般的機関がようやく発展途上にある以上、ここに返還すべきである。

文芸年鑑のこと

私は本家さんの諒解と、賛成を得て、第一回の『満洲文芸年鑑』と、G氏文学賞委員会を解散し、その発行所からも解放されたのであった。同時に協力を得た各氏に、改めて感謝したのであった。

なお第二巻(昭和十三年版)の発行人が、橘秀一となつているのは、万一の場合の印刷代金の保証がないので、多分文芸年鑑編纂事務委員として名を連ねた、青木實、吉野治夫、西村真一郎、城小碓の四名のうち、西村

満洲文話会と名のる以上、国都を無視することは出来ない、その声のバックには、満日文化協会からの資金援助の噂も伴っていたようである。今村事務員は会費納入整理、月刊会報の発行、毎月例会、委員会の準備、等に逐われ、対外政府、文化機関との接渉などのため、事務長の任命の必要に迫られ、満洲日日新聞学芸部記者とし

が奉天市の「満蒙評論社」の社員をも兼ねて評論をも執筆していたので、その社の社長名を発行人として、責任を明らかにしてもらつたように記憶している。

この巻の雑録欄には、昭和十二年中の、文話会の会合記録をはじめ、文学関係の会合をはじめ、出版、新聞、雑誌への会員の執筆論文、作品まで月別に記録しているのは、誰の作業か、深く敬意を表したい。

康徳六年版の第三巻は、新京の満洲文話会の発行となり、責任者として今村栄治が記されている。編纂事務委員一同として担当責任者の氏名がないのは不当である。

第二巻の巻頭の末尾に、

「なほ本年鑑は満洲文話会の編纂によつて逐年刊行せられるものであることを附記して置く。」

と書いておき乍ら、

康徳七年版は、無断休刊し、

康徳八年版 満洲国各民族創作選集 第一巻

康徳九年版 同 第二巻

を東京創元社より発行し、現地編纂者 古丁、山田清三郎、北村謙次郎としているのは、満洲文話会の発行権に対し、いかなる諒解があつたのか、出来るなら国都発

行をつづけてほしかったし、方針の変更につき、うやむやにしてみましたのは理解に苦しむ。

敗戦に近く、創元社版第三巻への原稿呈出方依頼があったが、国都には、記録のみ記載の満洲芸文年鑑、康徳九年度版、満洲芸文連盟より康徳十年十一月刊行されたが、作品掲載のうま味のあるものだけが、なぜ東京発行になったのか、地方在住のものには、不可解であった。

「渦中の人」と「旅人」

秋原 勝二

満洲の当時のことを思い出して書くのは、たやすくはない。それでも心に残しているものはあるので辿ってみる。

『満洲文芸年鑑』が出たのは昭和十二年ごろであるから、今から五十六年ほど前のことになる。私は昭和十四年まで大連にいたのだから、すぐにも書店で手に出来る筈のだが、それを買ってはいない。なぜなのか、と思いつくが、関心が薄かったせいのように思う。

私が今、言えることは、『満洲文芸年鑑』を熱心に刊行した人たちの動きではなくて、(それは何も知らないので書けない)それへの関心の薄かったことについてだけであろう。

その関心の薄さは、当時、大連の『作文』誌の同人の末席にいて、熱心に作品を発表しようとしていた私の姿勢と関係がある、と思う。

私は満七歳の秋から満洲で暮っていた。大正九年の尋常小学一年生の第二学期からであるから、大人になって渡満した層には属さない。また、満洲生まれでもなく、いわば満洲育ちの部類である。

日本の若者が渡満したとき、かかりやすい心の病に望郷病というのがあった。日本人にとって、緑深く水豊か人多き日本内地の生活と、広漠、無味乾燥の大自然の中の、人影少なしとはいえ異民族に囲まれる満洲生活は、段差の激しさ、むなしさで若者は傷つくのである。渡満したのち、やがて故郷恋しさに堪え難くなるのである。極端な場合は、故郷に戻りたくてたまらなくなるのである。

私は、昭和十八年に満洲国の弘報処から委嘱されて、北満洲の北安省徳都県にある双竜泉開拓団に一週間ほど滞在したことがある。

そこに辿り着いた直後の夕方、その開拓団本部に何かが起こったらしく、異様なざわめきが湧いたのに緊張し耳をそばだてていた。やがて、団員の行方不明になっていた一人の若者が、その夕闇の中でみつかったためであることがわかった。

私はその年の暮れ、それを「風雪」という作品の中に書いているが、若者はあの広荒漠々の五大連池休火山地帯の開拓地の生活に苦しんで脱走を企て行方不明になっていたのだった。

その辺りはロシアのシベリアよりは南の地域であるが、行けども行けども人家はなく交通の便も遠く離れていて、脱走しても生きのびられるところでないのはシベリアに似たところがあった。それだけに若者が戻って来たのをみつけたどよめきは全員の安堵を伝えた。若者ととりついたのが、「望郷病」であることに私はすぐに気がついた。一望涯なき草原の曠野を、ひとり彷徨し続けた若者は、死をたぐっていたのにちがいがなかった。

遠くに見うしなつた故郷日本への郷愁は、このように時としてのちを賭する事態をひき起こすことがあった。

私は、『満洲文芸年鑑』の第一集が刊行された昭和十二年に「故郷喪失」という随筆を大連の満洲日報紙に書いた。また同じ年「夜の話」という作品を『作文』誌上に発表した。今生活している満洲と、私にとっては余り知らない日本内地の衣を着た自分との喰い違いに苦しん

でいたときで、それを自分の文学作業の中心テーマとすることを自覚したときである。満洲の自然と異民族の目を目前にしながら日本語を話している自分の生活の違いに苦悩する、その「渦中」にいた自分を私は見ていた。それが『満洲文芸年鑑』に興味を持つ余裕がなかった意味だと思われる。そういう自分をそこから救出する道を探ろうと、さまざま歩いてきた私は、『満洲文芸年鑑』が出たことに強い興味も、まともな感慨も持てなかったのは私としては当然であつたらう。

私はあまり人の作品を読む方ではない。この種の問題に顔をぶっつけている作品に行き逢えなかつたこともある。自分もがいてるのであつて、人の哀歎に心を尽くせなかつたのであろう。この望郷にも似たほたるかな日本と、満洲の現実を調和する世界を捉えようとすることは私には至難の業で、帰る家のない日本ならばいつそ日本を打ち捨てるしか特効薬はないように見えた。私はおそらく、自分が子供のころから満洲に暮しているのは、日本から溢れ出たせいで、いわば日本から見棄てられたと思う心情が渦を巻いていたからだろう。日本のすぐれた小説もあまり読まなかつたのもそのためか、むしろ

る外国のそれも特定の作品の翻訳ものを多く読んでいたので、日本語の神髄を知る機会も失つた。

日本を棄てて満洲を凝視することに賭けた私は、満洲で書かれる日本人の作品も、満洲を見に来て書く日本人の作品も、全部、的外れに見えた。満洲で生涯を尽くそうとしている者と、日本から来てひと廻りして日本に帰って行く者、当分は満洲で暮してもいずれば日本に帰って行く者とは、全然違う人種に見えた。『満洲文芸年鑑』に集録された作品の大半は、この一番後者に属するもので、満洲で暮すのか、日本に帰るつもりか、どちらかずつのものばかりに思えた。これはまだ「旅人」の世界であつて、没頭する「渦中の人」のものではない。そういうひとりぎめが私にはあつた。

満洲の文学界が、大きな動きを示しているとき、私は昭和十四年に大連から中部満洲の東方にある吉林に移つた。それは満洲国の全鉄道の運営を満鉄が引受けたので、満鉄社員は挙げてその鉄道のそれぞれの地域に派遣されたのである。出張ではなく、転勤である。私は大連の満鉄本社の経理部から清朝発祥の地といわれる吉林にある鉄道局の経理部に、という訳である。

満洲国の首都である新京に蝟集した文学人の晴れがましそうな動きを背に、新京から東へ、朝鮮国境図們に至る鉄道を当時京図線と称んでいたが、その鉄道線路を徒歩で施設の調査をしながら、沿線の朝鮮農民が吉林から

東の方に浸みこむように定着、生活している実態を覗いていた。満人と朝鮮人が交錯して、その間を日本人が糸のように縫い歩く満洲の一面を凝視し続けることが出来た。吉林から東は山岳地帯で、老爺嶺、威虎嶺を越え哈爾巴嶺山脈をすぎると、地形は突然急落、低地を見下ろす雄大な眺望になる。私はそこに天険を見た。その中に、白衣の民族と青衣の民族の先端がふれ合い生きる姿は、日本人が勝手に国都新京でさわいでいるものとは異質のものであることを肝に銘じた。

旅人『満洲文芸年鑑』など一連のものが、私にはそのように見えていたのであろう。

満洲の回想あれこれ

——『満洲文芸年鑑』の復刻に際して——

大谷 武男

満洲国の消滅と共に満洲での日本人の文化活動は抹殺されて久しい。満鉄調査部の知的業績については近年来草柳大蔵氏らによつて解明されたが、この度、文化活動の一翼である「満洲文芸」の年鑑が、葦書房によつて復刻されることになつたことは喜ばしい快挙である。

しかし解説篇に何か書けと言われて、いささか当惑している。というのは私は満洲国を信用しておらず、満洲には満洲独自の文学をという論議にも、また新京に形成された満洲文壇にも加わっていないからである。だから当時のことを語るには資料もないし、「第八号転轍器」の作者日向伸夫その他の作家については他の適任者に譲つて、私は自分の立場を語るにとどめたい。第一に私は目的をもって満洲に渡つたのではない。物心のつかぬうちに大連市の近郊金州に連れて行かれ、終戦まで一度も日本の土を踏んだことがないし、また自由の温床であ

る大連と金州以外に居を移したこともない。だから、異国に馴染み、そこに新しい文化を創造するよりも、母国回帰の精神が絶えず優先していたのである。

金州に住みついた私は、異国に來たという違和感は殆どなかった。日本の田舎と変わらぬ自然と四季おりおりの遊びがそこにあり、冬の寒さや窓ガラスの氷花の美しさ、日本の祭りの他に元宵節の花火、盆の万灯会に物珍しさが加わり、読みものはみな東京の少年雑誌や本であった。異国の子供達との遊びにも人種的な差別は全くなかった。私が「植民者」としての原罪を感じるようになったのは、青年期に大連に居を移してからである。

明治期から大正の前半までの大連は、その頃の日本内地の諸都市に比べてはるかに西欧的なハイカラな街であった。明治の末から大正の初期にかけて再度大連市を訪れた有名な文明批評家島村抱月は、『早稲田文学』にこう書いている。

「大連の日本人は古代ギリシア人に似ている。下に働く階級を持ち、芸術やスポーツを楽しんでいる。ここには上に威張る軍人も官僚もいない。市民は自由である。自由ゼロの日本人はせめて一度は大連に來て西洋

風の自由を味わって欲しい」

当時の大連の日本人は西洋や日本の文学に親しみ、芸術の享受者ではあっても創造者ではなかった。その点だけは、伝統芸術を持たず、自らが創造せねばならなかった古代ギリシア人と異なっていた。

大連は背後地の広大な農業鉅業資源と異国人の膨大な労働力に養われ、母国の巨大な投資、無税地域という恩恵の上に栄えていたが、芸術創造面では不毛地帯であった。

しかし大正も末期になると、まずもつとも短い芸術である詩が開花した。大連の詩誌、『亞』の安西冬衛である。その詩の象徴と言える美しい蝶は、奥地ではなく海を越えて日本にひらひらと翔んで行った（彼はそこで日本の新詩運動の核のひとつとなる）。

在住日本人の文学活動は昭和七年前後に始まる。結社としては満鉄社員を中核とする同人誌『作文』が挙げられるが、それ以外の日本人作家の活動も殆ど大連が中心であった。

しかし昭和十年代になると、事情は一変する。日本の国策に添う大陸指向は、昭和十二年に作られた日独協同

製作映画「新しき土」の示すように広大な満洲の奥地であり文化の中心は満洲国の首都新京（長春）であった。

北村謙次郎も竹内正一も大連から奥地に転ずると作風が一変し、竹内はハルビンに行つてからエミグレを描く独自のテーマを発見し、北村は新京の満洲文壇の中核となった。

芥川賞選考などでかねて外地指向に傾いていった文春も新京に支社を置き、正に日本文壇の外地への拡大であった。そして日本の作家檀一雄、木山捷平も新京に直行して満洲文壇に加わり、大連は文学の孤島の感が深い。

『作文』の同人も大部分大連を離れ、青木實は業務上直接満人と接触して満人小説に新境地を開き、秋原勝二は吉林で「故郷喪失」の問題を提起した。あの神経質な吉野治夫も、新京に行くといつた八字髭の国士たる風貌になった。

その頃は私大連にいて文学に意欲を失いつつあった。草野心平や山田清三郎が図書館を訪ねて來たが何を話したか記憶していない。儀礼的なやりとりで終わったようである。

私は大連図書館に「将来の図書館論」を提出して採用になったが、同時に持ちこんだ「ストリンドベルヒの諸断面」という論文が活字になると石川鉄雄や天野元之助の目にとまった。

最初に近づいて來た文学青年は大内隆雄で、ある日突然やつて來てカバーを掛けた雑誌を私の机上に置き、「読んでごらんさい」と言つて書庫に入った。開けて見たら『戦旗』だった。カバーをとったまま机の上に置いたら、書庫から出てきた大内が吃驚して取り上げてしまった。大内がそのまま持ち去ったか記憶にないし、読んだという記憶もない。私が左がかったことを書いてるのに目をつけたのだろうが、私にはプレハノフや中野重治はよく分かるが、レーニンや蔵原惟人には親しめなかった。

何年か経つて大内隆雄が青年会館（YMCA）の文学の集会で私に立会演説を申し込んだ記憶はあるが出た記憶はない。その会には新京から論客の木崎龍も來ていたが、大連の連中に活を入れに來たのだろう。その大内が私の「人形のような女」をほめたのだから面白い。

その「人形のような女」が、第一回のG氏文学賞の候

補になった。「G氏文学賞」は詩人本家勇(城小雄)が私費を投じて文学振興のために作った制度で、永く記憶さるべき美挙である。選考の結果、『作文』同人の小杉茂樹の詩集『麦の花』に決まったのは極めて妥当なことであった。小杉茂樹は現在、作文同人であると同時に『東京四季』の主筆者でもある。

私が文学に関心をなくしかけた頃、大連にやってきた日本の一流作家や批評家が肩胛はった田舎者に見えたのは何故だろう。

とにかく日本の敗戦と同時に砂上の楼閣の満洲国は亡んだ。そして日本の文壇に根を持つ檀一雄、木山捷平、また満洲文壇の圏外にあった「シベリア物語」の長谷川四郎以外の現地日本人作家は日本ジャーナリズムから完全に黙殺された。檀一雄の盟友で川端康成にほめられた北村謙次郎も、終生文春の徳田氏と親交のあった竹内正一も例外ではなかった。

満洲でもある時期、軍部が日本の資本は満洲に入れないと豪語したこともあったが母国イギリスから独立したアメリカにはなり得なかった(なれる道理がない)。

またアルジェリアのカミュのように母国フランスの文

学界に新風を吹きこむ作家も現われなかった。(満洲生まれの戦後作家安部公房の『砂の女』の発想の根底に、彼の特異な満洲体験が潜在しているような気もするが、彼は満洲文壇とは無縁の人である)。

昭和三十年代のはじめ、上京した『満洲歳時記』の作者金丸精哉がお茶の水あたりの喫茶店で北村謙次郎や竹内正一とした会話の一節、

金丸(北村を見ながら)「君達東京にいるのにどうしたの、少しは活躍してると思ったのに」

北村「ムニャムニャ」(満洲時代に厚遇された某誌編集者の掌を返したような冷めた仕打ちを自嘲気味に語る)

竹内「なにも、いまさら死屍に鞭うつこともないじゃないか、大人げないよ」

北村「よせよ。おれはまだ死んじやいねえよ」

二人ともすでに故人である。生きていたら『満洲文芸年鑑』の復刻版を見て喜んだにちがいない。

満洲文学の一部

本家 勇

この記事は記録によるものでなく記憶によるものである。何分にも半世紀以上も経過しているので記憶も充分ではない。

満洲(関東州・大連)における文学的作品としては明治の末期から大正の中期までは見るべきものはなく、短歌、俳句等の愛好家のグループはあったが内地(日本)の結社と繋がっていたようであった。大正の末期から昭和の初期には現地に雑誌が見られるようになった。ことに詩の雑誌としては安西冬衛等による『亞』が華やかな存在として日本の詩壇から注目されていた。新聞以外に総合的な雑誌としては『満蒙』『新天地』等が満洲在住者の文芸的作品を掲載していた。多くの場合、作家としてではなく愛好家として特別の人を除いては、勿論、稿料はなかったように聞いていた。つまり満洲では文学専門の人は居なかった、只、文学の愛好家として、また文芸雜

誌も私費で賄っていた。

関東州では定期刊行物は総て許可制であつて容易に許可されなかった。普通届出制の出版でも同名で年二回以上は出せなく、それに年一回でも号数は打たれなかった。定期刊行物ではなく個人的にグループ的に雑誌の名を変えて出していた。文学的な定期刊行物は二、三あったが、満洲事変が始まった昭和六年の末頃、満洲共產党事件があつて左翼的な文芸愛好家はその巻添で殆ど警察に検挙されてその余波で、満洲の文学界は一時、火が消えたような状態になった。それでも思想的に利用されなかった文学愛好家たちは、個人的に届け出た普通出版物の小冊子を出し始めたが、合同して定期刊行物の許可をとつて昭和七年に出したのが『作文』であつた。

『作文』は始め『文科』という名であつたが、途中で『作文』に変更した。作品は詩、小説、評論、雑文で、満洲では五十五号発行し、途中休刊していたが東京で再刊し、現在百五十五号を編集集中である。

昭和十年頃迄は文学的集団は大連が中心であつたが、漸次新京に移り全満洲に発展していった。そして中国人の集団も見られるようになった。G氏文学賞は昭和十二年に

大連で創設された。出資者は匿名を希望したので名をもじってG氏とした。賞金は五十円のスイス製の銀側懐中時計であった。これらは発展した『作文』を中心とした同人、その他の選考委員によって選考した。

選考委員は左の五氏であった。

吉野治夫 満洲日日新聞社勤務 小説・評論
青木 實 大連満鉄図書館勤務 小説
福家富士夫 大連満鉄病院医師 小説
横沢 宏 貿易商社勤務 詩・評論
城 小確 食品会社勤務 詩
尚、受賞者は
第一回 小杉茂樹 詩集 麦の花 昭和十三年
第二回 吉野治夫 小説 手記 昭和十四年
第三回 竹内正一 小説 氷花 昭和十五年

昭和十六年頃、新京に満洲国文教部の外郭団体として満洲文話会が設立され満洲文話会賞が創設された。G氏文学賞はG氏文学功労賞として引き継がれた。

尚、『満洲文芸年鑑』は満洲文話会の事業として発行されるようになった。実は『満洲文芸年鑑』としては

解題

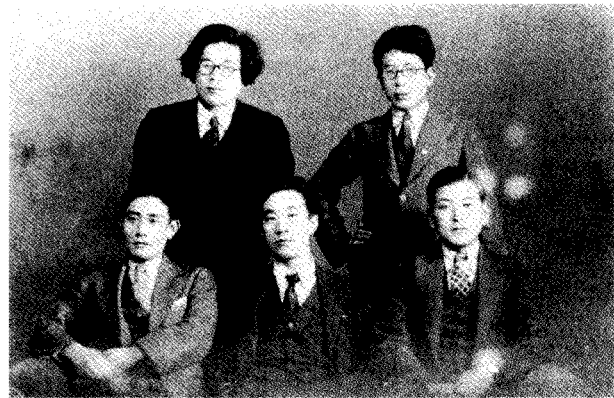
満洲文学の胎動期

西原和海

(1)

『満洲文芸年鑑』は、第一輯（以下、『年鑑I』というように略称）が一九三七年（昭和十二年）十月一日に、第二輯が一九三八年十二月十五日に、第三輯が一九三九年十一月十日に、それぞれ刊行されたが、第四輯はついに陽の目を見ることがなく、この年鑑の刊行企画は中絶した。今回、ここに復刻されるのは、右の第一輯から第三輯までの、全三冊である。『年鑑I』原本の判型は菊判、IIとIIIは四六判であったが、復刻に当たっては、便宜上、全三冊ともA5判に規格が統一されている。

この『年鑑』は、詩・小説・評論などを中心とした年間代表作のアンソロジーであることを、内容上の大きな特色としている。しかし、この種のアンソロジーは、すでに大連では前例が見られた。一九三二年三月、満洲文芸年誌刊行会から出た『満洲文芸年誌 第一巻』（未見）



第一回G氏文学賞選考委員会記念写真(昭和12年)右より福家富士夫、青木實、吉野治夫、城小確(本家勇)、横沢宏(提供・本家勇)

「文芸年集」としてその前年に大連で発行されたが一号のみで、判は菊判大で詩、小説、評論、文芸作家の名は付けたようであった。編輯者は小説青木實、詩城小確、評論西村真一郎であったように思う。

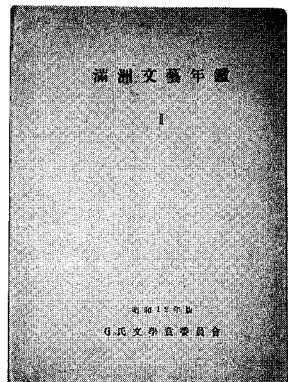
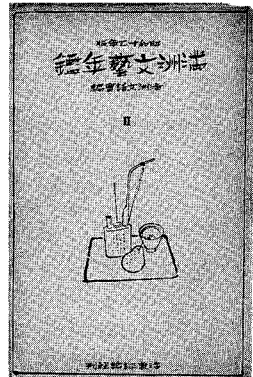
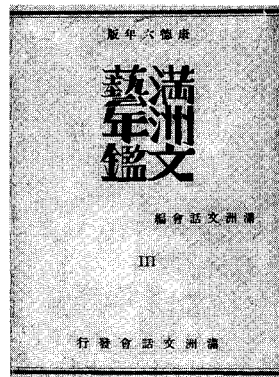
(14)

が、それである。この『年誌』は、中村秀男と近藤綺一郎の尽力によって編纂され、翌年以降も逐次刊行が予定されていたようだが、第二巻は出さずに終わった。青木實の証言によれば、同書に収録された作品は執筆者の自選によるものであり、その出版費用も、執筆者に掲載料金を分担させて、まかなわれたのであった。

また、一九四三年十一月には、満洲文芸聯盟年鑑編纂委員会によって編まれた『満洲文芸年鑑 康德九年版』（満洲富山房刊。未見）が出ているが、これは作品アンソロジーではない。ここで用いられている「芸文」という概念には、文学をはじめ、演劇・音楽・映画・美術・写真・工芸など、芸術一般の諸ジャンルが広く包摂されていて、同書は、これら諸ジャンルの当該年度の動向を記録したものであった。この『芸文年鑑』も、右の一冊が刊行されただけで、あとが続かなかった。

年刊形式の作品アンソロジーとしては、他に、『満洲国創作選集』があったことはよく知られている。この『選集』の版元は日本内地の創元社であり、第一巻の康德八年版（一九四二年六月三十日刊）と、第二巻の康德九年版（一九四四年三月三十日刊）の二冊まで出されたもの

(15)



『滿洲文芸年鑑』第一輯～第三輯 書影

わめて貴重なものとしなければならぬ。かなりの量に及ぶ作品にじかに接することができるのも有難いが、例えば各巻に収録の「滿洲文芸人名録」一つを取ってみても、それが私たちに裨益するところ、いかに大きいことか。

(2)

『年鑑Ⅰ』は、G氏文学賞委員会によって編纂され、同委員会から刊行された。G氏とは、詩人城小確（本名・本家勇）の匿名であり、G氏文学賞とは、城からの寄付金を基金として設定されたものだった。第一回G氏文学賞は、『年鑑Ⅰ』が出る少し前、一九三七年三月、小杉茂樹の詩集『麥の花』（一九三六年四月一日、大連詩書倶楽部刊）に授賞されたばかりだった。受賞者には、正賞として賞状、副賞としてスイス製の銀時計が贈られた。さらに城は、『年鑑Ⅰ』出版の基金に当てるべく五十円を同委員会に寄付している。

城小確の「滿洲文芸年鑑」第一輯⁽⁵⁾という文章によると、同書の編纂に当たっては、まず委員会において執筆者を選考、そのうえで執筆者それぞれに掲載作品の自

の、戦局困難に伴う出版事情悪化のためか、第三巻は中絶のやむなきに至った。これら二冊には、いわゆる満作家（在満の中国人作家）や白系ロシア人作家の作品も少なからず集められ、当時の満洲文学の動向を瞥見するのに便利ではあるが、収録作品が小説ジャンルのみに限られていることや、資料的な記録（年度概観、人名録の類）が欠けていることなどからして、これを『年鑑』と見るには、いささかの無理を承知しなくてはなるまい。

こうした類書に比べると、『滿洲文芸年鑑』は、それが曲がりなりにも三年間、持続的に刊行されてきたという意味からも、『年鑑』として相応の役割を果たしてきたものと評価されてよい。これに先行した『滿洲文芸年鑑』が、自選作品のアンソロジーに留まり、文学青年仲間うちの手すさび程度であったかと想像されるのに対し、『年鑑』の方は、内容的に格段の充実ぶりを窺わせるのである。ことにこの三年間というのは、満洲文学の開花期とも、飛躍期とも見なすべき時期に当たっている。もはや今日、満洲文学の諸相が深い霧に閉ざされた迷路の向こうに、どうにも見えにくくなっている実状を思えば、この『年鑑』に盛られた情報の価値たるや、き

(16)

選を依頼したということである（これは、先の『文芸年誌』が採った方法に共通する）。また、同書の出版予算が限られていたため、作品の字数がなるべく少ない目であることを条件としたとも述べている。こうしたことは、同書の『年鑑』としての客観性を多少とも損なうものであった。

(17)

当時、満洲文学界の主流を形成していたのは、大連で発行されていた同人雑誌『作文』であった。詩誌としては、やはり大連で出ていた『鶉』が代表的な存在であった。『年鑑Ⅰ』では、全体的に、この『作文』の色彩が相当濃厚であることが一つの特徴ともなっている。G氏文学賞委員会を構成する十名のうち、『作文』同人は、青木實、落合郁郎、小杉茂樹の三人が占めるにすぎず、その点では、できるだけ委員会から『作文』カラーを払拭したいとする配慮が窺えはするものの、委員会の事務局や『年鑑』の発行所が、作文発行所（青木方）に置かれていたこと、或いは、そのころ城小確は『作文』同人を脱退してはいたが、同誌とはきわめて近い関係にあったことなどから推して、委員会の結成準備や『年鑑』の出版企画などは、当初から『作文』グループの主

導によって押し進められたであろうことが容易に想像されるのである。

その内容面から同書を眺めてみると、小説部門の寄稿者八名のうち、福家富士夫ただ一人を除き、他の全員（青木、秋原勝二、竹内正一、富田寿、町原幸二、松原一枝、三宅豊子）が『作文』の同人であった。詩部門では落合と小杉が、評論部門では大谷健夫と吉野治夫が同誌に属していた（ただ、詩部門では、寄稿者十三名のうち、『鵠』の同人が六名（井上麟二、小池亮夫、瀧口武士、松畑優人、三好弘光、八木橋雄次郎）も参加している、これはこれで注意を引かれよう）。結局、『年鑑Ⅰ』の執筆者二十七名のうち、『作文』同人だけで十二名（城も加えれば十三名）もの多数に及んでいるわけである。

このように、内容的にも『作文』色が顕著であったことは、同書の『年鑑』としての客観性をさらに弱めているかのようにも疑われる。恐らく刊行当時、同書に対する反撥の声が『作文』の外から幾らかは聞かれたのではあるまいか。当該年度中、『作文』同人のもの以外には、これといった作品が殆んど発表されなかったというのが

この『年鑑Ⅱ』では、編纂者がG氏文学賞委員会から満洲文話会に移行し、発行所も満蒙評論社（大連にあった出版社で、月刊綜合雑誌『満蒙評論』を刊行していた）に変わった。満洲文話会とは、満洲における文筆家相互の連絡・親睦を目的として、一九三七年六月、大連において結成された文化団体である。G氏賞委員会のメンバーは、やがて全員が文話会に加入することになったが、それを契機に、『年鑑』刊行の既得権を文話会に譲ることになったものと思われる。文話会の将来を期待しての措置であったのだろう。事実、文話会の編纂によってこそ『年鑑Ⅱ』は、Iに比べ数段の飛躍をとげることができた。

一九三七年という年は、第一回G氏文学賞の授賞、満洲文話会の結成、『年鑑Ⅰ』の誕生といった出来事が続き、満洲文壇はいつにない活況を呈したのだった。古川哲次郎「一九三七年満洲文壇の回顧」（『年鑑Ⅱ』所載）でも指摘されているように、ことに『年鑑Ⅰ』発刊の意義は大きかった。こうした出来事が在満の文学者たちを刺戟し、それが作品量の豊かさとして現われ、『年鑑Ⅱ』の内容的充実の結果したともいえよう。また逆に、いよ

仮に客観であったにせよ、同書は、この種の文芸年鑑として、いまだその出来は未熟という評価を免れ得まい。作品全体の水準から見ても、編集姿勢の幼さからいっても、いささかの物足りなさを覚えるのである。しかし、ともかくも満洲文学は、そこから出発しなければならなかった。その意味では、『作文』の業績を過小視するわけにはいくまい。

第二輯に至って、『年鑑』は内容的に一層の充実を見せる。収録作品のジャンルは、従来の詩・小説・評論に加え、短歌・俳句・随筆まで拡がることになった。巻頭に各ジャンル当該年度の「概観」が置かれ、巻末「雑録」の項目も増やされるなど、資料面でのさらなる整備が図られた。個々の作品には相当に長文のものも見られ、一巻全体の活字量が大幅に増大した結果、なかなか読み応えのある出来となっている。寄稿者も広い範囲に及び、一つの雑誌なりグループなりの党派色から脱することができた（例えば今回は、小説部門の執筆者十六名のうち、『作文』同人は七名を数えるにすぎない）。満洲文学の全容を、より俯瞰的に眺望する手だてが読者にもたらされることになった。

いよ機が熟したとすべきか、彼らの年来の文学的習練と熱意とがようやく雌伏期を脱し、『年鑑』編纂をはじめとする、この種の実践活動に拍車をかけることになったとも考えられる。およそ十年前、大連では安西冬衛や瀧口武士、北川冬彦などの詩誌『亞』の華々しい活躍があったが、同誌の終刊以後、この地の文学状況はずっと低迷気味であった。そして今、ここに、新しい文学世代の擡頭が顕著になつてきたわけである。そうした意味で一九三七年とは、満洲文学史における一つの画期と目すべき一年間であったといえる。この活況は『年鑑Ⅱ』に至っても窺うことができる。

『年鑑Ⅲ』は、満洲文話会の編纂により、同会から刊行された。「概観」では新たに演劇と児童文学の項目が設けられ、第二輯までに比べ、さらに周到な状況見取り図が提供された。しかし、IIに見られた「年況」（各月の行事と発表作品の記録）が今回削られたのは惜しい。本巻中、特に注目されるのは、林適民、田兵、小松など満系文学者の作品が収録された点である。もし第四輯以降が続刊されていたならば、満系作家の作品はもっと増加していたであろうし、白系ロシア人作家の作品も加え

られるようになったに違いない。評論部門では、IIに引き続き満洲文学論争に関わる論者が集められていて、なかなかの興味をそえられる。

この『年鑑III』が出た年、一九三九年の七月、満洲文話会の本部が大連から新京へ移されることになった（これに伴い『年鑑』の発行地も大連を離れたのだった）。

このことは、満洲文壇の中心地が前者から後者へ移行したことを意味し、いわば関東州（大連）文学から満洲国文学へとといったふうに、満洲文学の実質面での変容を促す気運があつたことを意味する。

この気運は一九三七年以来、急速に高まってきたものだった。それは、在満文学者たちの多くが満洲国問題を強く意識するようになったことを契機とする。文学における満洲国の問題とはすなわち、満洲国における文学とは何かというテーマに他ならず、ここに、満洲文学論争が賑やかに展開されるようになったわけである。一九三七年に見る文学的活況とは、個々の書き手の成熟によるものであつたことは右に触れた通りだが、と同時に、この論争によって過熱されたところも大きかった。満洲国建国（一九三二年）から五年を経ての、このような気運

は、これからのことになる。そして関係者の多くは、彼らが関東州にあるうと満洲国にあるうと、やがては満洲国そのものの現実によって、文学的にも生活的にも、苛酷な境涯を強いられることになる。満洲文学の命数はあまりに短かつたのである。

(3)

この『年鑑』三冊に収められた作品の個々について、今は詳しく見ていく余裕はない。ただ、『年鑑II』の「緒言」に「本輯では所謂『満洲文学論』の発展を系統的に理解し得るやう編輯に留意した」とあるように、全体のうちで評論部門が最もまとまりのある内容を保っている点は、特に注目しておきたいところだ。『年鑑III』の評論部門でも、この「系統」性は配慮されているようだし、Iにおける幾つかの評論にも満洲文学論の萌芽が窺われるのである。全三冊を通してこれらの論考に接するならば、当時の満洲文学がどのような問題をかかえていたか、私たちはかなりの臨場感をもって理解できるはずである。

こうした満洲文学論の百家争鳴ぶりについて、吉野治

の醸成であつた。文話会本部の満洲国への移転とは、帰するところ満洲文学の、建国運動への参入ということでもあつた。これら三冊の『年鑑』に即していえば、Iにはまだ関東州文学の色あいが濃かつたが、IIとIIIでようやく、満洲国文学への志向があらわになってくるのである。

だが、『年鑑III』の「行事」欄にも記録されているように、一九三八年に刊行された小説集といえは、奥一『与太もんのマンシュー』、冬木羊二『青き夜の医師』、竹内正一『氷花』と、わずか三点にすぎないのである。満洲文壇の活況とはいっても、まだその程度のものにすぎなかつた。満洲文学史を語る上で当然欠かせない名ながら、『年鑑』三冊にまだ登場していない作家や詩人も少なくない。例えば、山田清三郎、逸見猶吉、緑川貢、井上郷、野川隆、北尾陽三、筒井俊一、加藤秀造、大野沢緑郎、川島豊敏などといった人たちである。数多くの文芸作品が生まれ、その関係の出版が活発化して

(20)

るのは一九三九年以降なのである。そのような意味では、『年鑑』三冊が今日の私たちに印象づけるのは、満洲文学胎動期の諸相だといつてよい。その本格的展開

夫は、これも同じ時期に発表された「満洲文学の現状」と題する文章で、以下のように要約してみせた。

満洲に発芽してゐる文学が一つの運動となつてゐるとすれば（それは理論に於いて持続的に多年執拗に繰返され、作品に於いて未だ実証されてゐない）、その特色は、一、満洲に於いて独自の主題を発見しようとする事、二、日本文壇依存心を排棄することに雪崩れの如く行進してゐることであらう。

吉野もここで述べているように、その頃、満洲文学のありようを巡って当事者たちの間には、「理論だけが先行し、実作がそれに伴っていない」という指摘がしばしば行なわれたものである。そのような事情のもと、理論と実作の両方を統一すべく努力した作家として、青木實の名を挙げる事ができよう。その実例を『年鑑』の中に求めてみるならば、作者の理論を主張したものとては「満人ものについて」（『年鑑III』所収）があるし、実作としては「孫の不幸」（『年鑑I』所収）と「一農夫」（『年鑑II』所収）二篇を読むことができる。

青木の考えを別のところに聞いてみよう。大連から出

(21)

ていた詩誌『二〇三高地』十月版（通巻第四冊、一九三九年十月発行）が特輯「在滿作家の進むべき方向」を組んだとき、青木は「課せられた使命」と題する小文を寄せることがあった。左はその全文である。

一、満洲が民族融和の国である以上、日本人の独善は許されない。しかし指導民族としての立場は兎もすれば独善を發揮し易い。特に官僚に於てその傾向は著明なものがある。文学を以て、民族融和の実を示すこと。一、満洲は農業国なり。しかも農村に未だ土豪劣紳の跡は絶えない。土を汗して耕すもの立場を、文学を以て擁護すること。一、かかる満洲に生きるべき大陸日本人の美事なタイプを文学に生かすこと。

このような観点から青木は、その創作面において、満農（中国農民）、愛路運動、農事合作社などを素材として、独自の領域を拡大していった。右の論調による限り、青木は満洲国の存在を容認したうえで、その枠組みの内側で、満洲国の理念（「民族融和」）の実現を、みずからの文学表現の積極的課題としているかのごとく見られよう。しかし、それでは余りに皮相的な解釈に留ま

を展開せしめたことは異色といはねばならない」と特筆されるほどのものであった。このエッセイは当然、『年鑑II』に収録されてしかるべきであったが、これとペアの関係にある創作「夜の話」が採られたため、見送りになったのであろうか。

秋原はいう。自分たちのように満洲で幼年期をすごした人間には、日本を「故郷」とする実感に全く欠けている。かといって、この満洲においても自分たちは、何ら精神的基盤となるものを所有していない。ただ「漂泊感」があるだけである。とすれば自分たち「満洲日本人」は、この土地でどのように生活を形づくっていけばよいのだろうか。——このエッセイは特に、秋原と同世代の読者（在滿邦人第二世）から深い共感を得たようである。秋原は、このような問題意識を出発点として、主として異民族問題をテーマとした小説を書き続ける。もし自分たちがこの土地に生活していくとしたなら、まず第一にぶつかることになるのは、日本人と中国人とがいかに関わっていくかという問題に他ならないからである。青木實がストリートに中国人を素材としたのとは異なり、秋原の場合は、日中両民族間の交渉の実相をひた

る。青木は「満人ものについて」の中で、自分が「満人もの」をテーマとするのは「正義感」に出發しているのだ、と主張している。恐らく青木にとつて、この「正義感」という一語は、当時においてはぎりぎり精いっぱい抵抗の表現であったかと思われる。満洲国そのものに対する否定の意志が、青木をして「満人もの」の執筆に駆りたてたのだと考えても、決して見当違いの評価とはならないはずだ。青木のいう「正義感」を問いつめてゆけば、そういうことになる。

満洲文学の理論と実作を統一すべく苦慮した作家としては、もう一人、秋原勝二の名をここで逸するわけにはいくまい。秋原の理論（というよりむしろ、ある切実な生活感情が一個の觀念にまで成長したもの）のエキスは、一九三七年に発表されたエッセイ「故郷喪失」に端的である。当時、この一篇が文壇にもたらした話題性はなかなかであつたらしく、その間の事情は『年鑑』のIIやIIIの「概観」などからも窺えようし、また、『満洲年鑑 昭和十三年版』の「文芸」欄において、「秋原勝二の小説「夜の話」によつて指摘せられた満洲生れの子弟「故郷喪失」の問題が意外の反響を呼び、少なからぬ論

すら凝視しようとする。秋原の姿勢も結局、「民族協和」の謳歌からはほど遠かつた。異民族との関わり、絶望的な困難さのみを語り続けたのである。

ここでは、青木、秋原両者のケースを引き合いにして、満洲文学論における理論と実作との関わりを眺めてみたのだつたが、実のところ、この理論と実作の乖離こそ、満洲文学の本来のありうべき姿として大切にされるべきであつたのかもしれない。なぜなら、この種の理論のおおかたが、満洲国の建国理念をタテマエとしつつも、ついにはそれをホンネとする方向へ走つてしまわざるを得なかつた時、もし実作の側がこれらに追隨するならば、そのことは、みずからへの裏切り以外の何ものでもなかつたからである。

『年鑑I』の刊行に前後する頃から、主として大内隆雄の手により、満系作家の翻訳作品が次々と日本人に紹介されるようになった。その折り、読者の感想、批評の類には、満系文学の「暗さ」を指摘するものが多かった。もちろん、暗くあつて当然なのだ。被支配民族の彼らにとつて、その「暗さ」こそ日本に対する抵抗の証しであつたわけである。だが、この時期の在滿日系文学も

やはり、ある種の「暗さ」におおわれていたというのが実際であろう。例えば『年鑑II』に収められた作品、吉野治夫「手記」、秋原勝二「夜の話」、町原幸二「隣二軒」、今村久米子「逃亡」、宮川靖「炎天」、西川清六「母へ」、島崎恭爾「安東」、富田寿「幾山河」、竹内正一「流離」と、これらに描かれた登場人物たちの誰しもが、まさに竹内作品のタイトルではないが、異郷での「流離」をかこつ人々なのである。満洲のどこにも定着する場所を見出し得ない、根なし草の日々を営む人間ばかりではないか。そして、これらに共通する「暗さ」にこそ、満洲文学の真実があったのでは……。

やがて数年を経ずして、こうした作家たちの殆んどが、この「暗さ」を脱ぎ捨て、より建設的な「明るさ」に向かおうと努め始める。それは取りもなおさず実作の側の、まがいの正統性に満ちた理論への屈服に他ならなかった。そのように見ていくならば、これら『年鑑』三冊に収録の作品が発表された三年間というのは、満洲文学にとって最も幸福な季節だったと言えるかも知れない。この三年を満洲文学の胎動期とするならば、それに続く展開期とは、すなわち満洲文学の終末期だったと見

なすことも許されよう。確かに、苛酷な運命ではあった。

〈注〉

- (1) 第四輯が出なかったのは、発行母体の満洲文話会が資金難であったためだという(青木實氏の指示による)。
- (2) 青木實「『東北地方文獻聯合目録』抄録感想」(『作文』第一四四集、一九八九年十二月一日、作文社刊)を参照。なお、『満洲文芸年誌』の内容については、大内隆雄「満洲文学二十年」(一九四四年十月五日、国民画報社刊)を参照のこと。
- (3) 第三巻のための作品選考がすでに進行していたことは、選者の一人、島木健作の著書『扇谷日記』(一九四七年七月二十日、文化評論社刊)に所収の「昭和二十年日記」にくわしい。ここには、候補作品のタイトルと、それに対する島木の寸評が記されていて興味深い。ちなみに、この『創作選集』の編纂は、満洲国側からは北村謙次郎、山田清三郎、古丁、日本側からは川端康成、岸田國士、島木の、六名の手になるものであった。
- (4) 第二回G氏文学賞(一九三八年)は吉野治夫の小説「手記」(『作文』第二十四輯、一九三七年四月刊に掲載)が、第三回(一九三九年)は竹内正一著「氷花」(一九三八年十二月二十日、作文発行所刊)が受賞した。翌年度からG氏文学賞は満洲文話会賞に吸収されることになり、文話会賞には作

- 品質とG氏功労賞の二つが設けられた。第一回満洲文話会賞(一九四〇年)では、高木恭造の詩集『鴉の齋』(一九三九年五月五日、作文発行所刊)と、日向伸夫の小説「第八号転轍器」(『作文』第三十六輯、一九三九年二月刊に掲載)が作品賞に、城小碓がG氏功労賞に選ばれた。第一回文話会賞については、取りあえずは『満洲読書新報』第四十号(一九四〇年七月十五日発行)を参照のこと。
- (5) 満鉄各図書館報『書香』第一〇〇号(一九三七年十月十日発行)所載。
 - (6) 『作文』は一九三二年七月創刊。一九四二年十二月、第五十五輯をもって終刊。『鵲』は一九三四年十二月に創刊。一九四一年一月、第三十七号(通巻第三十八号)をもって終刊した。
 - (7) 大内隆雄「満洲文学二十年」を読むと、当時の満洲文壇内に、『作文』のセクシヨナリズムを批判する勢力があったことが知られる。大内自身、G氏文学賞委員の一人であったにもかかわらず、この本の中で、『年鑑I』については僅か一行で片付けているのは腑に落ちない。
 - (8) 満洲文話会の結成に関わっても、青木實はじめ、『作文』グループの動向を無視することができないのだが、今はこれに触れない。文話会の活動実態についての具体的検証は、今後の大きな研究課題となろう。注(4)にも見るように、G氏文学賞委員会は一九三九年まで活動していた模様だが、その詳細は明らかでない。

- (9) 『亞』は一九二四年十一月創刊。一九二七年十二月、第三十五号をもって終刊。
- (10) 奥一「与太もんのマンシュー」は一九三八年一月十日、高梁社より刊行。冬木羊二「青き夜の医師」はモダン満洲社より刊行されたが未見。同書は内容を一部変更のうえ、一九四八年五月十五日、名古屋市の青雲社出版部より再刊されている。竹内正一「氷花」については注(4)を参照。
- (11) 『セルパン』一九三九年四月号(第九十九号)掲載。なお、同誌のこの号には、在満詩人十三名の寄稿による「満洲詩選」という特集もあって興味深い。
- (12) 『二〇三高地』は一九三九年四月創刊。第一冊の誌名は「仏手柑」、第二冊の誌名は「成吉思汗」であった。一九四一年二月、第十二冊をもって終刊。同誌と『鵲』が合同して満洲詩人会が生まれ、一九四一年五月、その機関誌として『満洲詩人』が創刊された。『満洲詩人』の場合も発行地を大連から新京に移そうとする動きがあったが、これは実現しなかった。
- (13) 『満洲日日新聞』一九三七年七月二十九、三十一日に連載。このエッセイは、秋原勝二の戦中・戦後の作品を集めた『故郷喪失』全五巻(一九八三年八月〜一九八五年十一月、作文社刊)の第二巻に収録されている。
- (14) 『満洲年鑑 昭和十三年版』(一九三七年十一月十八日、満洲日日新聞社刊)四一〇頁参照。

『満洲文芸年鑑』総目次

西原和海編

第一輯 昭和十二年版 (昭和十二年十月一日納本)

評論

満人の作家たちに就て 大内 隆雄 一四一六
土地と文学 大谷 健夫 一七一九

植民地文学の再検討——植民地文学の一般論として

西村真一郎 二〇一三
在満邦人の芸術的立場 古川哲次郎 二三一二六

『麦の花』感・モンタージュ

横沢 宏 二七一一三
『麦死なず』を読む 吉野 治夫 三三一一三九

詩

水、うを 井上 隣二 四二一四三
新京大同広場にて 落合 郁郎 四四一四五
葬堂へ 小池 亮夫 四六一四七
汽笛、棘の葉 小杉 茂樹 四八一四九

胡桃割り、手紙、春歌、地図

近藤綺十郎 五〇一五三

花筵 城 小碓 五四一五六

ブラゴエチエンスクの空 島崎 曙海 五七一五九

秋、秋 瀧口 武士 六〇一六一

距離、女友達 古川賢一郎 六二一六四

雨の日断章、夢の街 古屋 重芳 六五一一六七

それは私にはわからない、鵲 松畑 優人 六八一一六九

Boiler roomに住む黄蝶 三好 弘光 七〇一七一

打たんかな 八木橋雄次郎 七二一一八〇

小説

孫の不幸 青木 實 八二一一八九

雪原 秋原 勝二 九〇一〇九三

友情 竹内 正一 九四一一〇二

死亡室付近 富田 寿 一〇三一一〇九

歯車 福家富士夫 一一〇一一一六

雁の唱歌 町原 幸二 一一七一三二

紅葉 松原 一枝 一二三一一二九

乱菊 三宅 豊子 一三〇一一三九

雑録

満洲文芸人々名録 一四二一四六

『G氏文学賞』規約 一四七

満洲文芸年鑑規約 一四七

後記 一四八

第二輯 昭和十三年版 (昭和十三年十二月十五日発行)

緒言 満洲文話会 文芸年鑑編纂事務委員

概観

文芸評論界の概観 西村真一郎 一一四

小説界概観 大谷 健夫 五一九

詩壇回顧 城 小碓 一〇

歌壇の動向 甲斐 水棹 一一一九

俳壇展望 高山 峻峰 二〇一三三

児童文学追想 石森 延男 二三一三四

評論

満洲文学の精神 城 小碓 二五一一九

満洲文学に就て——城小碓氏の論を読んで—— 角田 時雄 三〇一三三

当為的と自然的——城・角田両氏の間隙へ——

建設の文学 大河 節夫 三三一一三七

幻想の文学——満洲文学の出発のために—— 木崎 龍 三八一四一

満洲文学の特有性 加納 三郎 四二一四六

満洲文化の文学的基礎——満洲文学とは何ぞや 金崎 利光 四七一五一

東洋の猶太民族 上野 凌裕 五二一五八

満洲に於ける『文学』の方向——文化一聯として—— 西村真一郎 五九一六三

満洲文学運動の主流 川上 旗男 六四一六六

一九三七年満洲文壇の回顧 佐藤 四郎 六七一七四

最近の国文学研究思潮につきて——『文芸復興』の 古川哲次郎 七五一一八〇

発刊を機として 渡辺 栄 八一八九

川端康成論 大谷 健夫 九〇一九八

チエーホフに於ける『絶望』 紫藤貞一郎 九九一一〇三

『天才論』批判の序章 西川 清六 一〇四一一九

詩

黄河、断章	高木 恭造	一一一―一二四
戯画、猿	井上 麟二	一二五―一二九
蝶の宿	城 小碓	一三〇―一三一
天邪鬼	古川賢一郎	一三二―一三三
湯、谷を這ふ	小池 亮夫	一三四―一四〇
薔薇百科辞典	三好 弘光	一四一―一四五
七月の愛の歌、新緑の夢	古屋 重芳	一四六―一四九
蟬の歌、悼歌	坂井 艶司	一五〇―一五三
寒北断章、喪失記	矢原礼三郎	一五三―一五五
巡礼、幼児	甘地 満	一五六―一五八
鴉、道	小杉 茂樹	一五九―一六二
小説		
手記	吉野 治夫	一六三―一八二
一農夫	青木 實	一八三―一九〇
夜の話	秋原 勝二	一九一―二三三
西喇木倫河	福家富士夫	二三三―二三〇
ある少年の記録	木崎 龍	二三一―二三九
泥家	鈴木啓佐吉	二四〇―二四六
老家行	長谷川四郎	二四七―二六二

満洲の受胎

隣一二軒	工 清定	二六三―二八一
逃亡	町原 幸二	二八二―二八六
炎天	今村久米子	二八七―二九五
母へ	宮川 靖	二九六―三〇二
桔梗の季節	西川 清六	三〇三―三一九
安東	松原 一枝	三二〇―三三五
幾山河	島崎 恭爾	三三六―三三一
流離	富田 寿	三三二―三三六
	竹内 正一	三六五―三七八
短歌		
事変は進む、山上にて	甲斐 水棹	三七九―三八〇
栗原大尉	富田 充	三八一―三八二
離心抄	荒川石楠花	三八三―三八四
旅順	伊東千鶴子	三八五―三八六
年若き僧	香川 末光	三八七―三八八
雨と満人	新井 重美	三八九―三九〇
激流渡舟	相川 澤	三九一―三九二
苦力	宮島 正美	三九三―三九四
吾兒	樺田 正東	三九五―三九六
北支事変抄	永原いね子	三九七―三九八

俳句

南嶺	三溝 沙美	三九九―四〇〇
新京	三木 朱城	四〇一―四〇二
氷山	高山 峻峰	四〇三―四〇四
不毛の地	久米 幸叢	四〇五―四〇六
奉天	石原 沙人	四〇七―四〇八
月	金子麒麟草	四〇九―四一〇
春耕	江川 三昧	四一一―四一二
柳絮	森脇 襄治	四一三―四一四
春聯	青山 静丘	四一五―四一六
隨筆		
鳶の笑	寛 太郎	四一七―四一八
喜怒哀楽帳	橋本八五郎	四一九―四二三
仕掛花火	石森 延男	四二四―四二六
深谷温泉にて	竹内 節夫	四二七―四二八
川柳と満洲	石原 巖徹	四二九―四三五
秋の隨筆	三溝 沙美	四三六―四四〇
雜録		
昭和十二年文芸年況		四四一―四五三
新聞雜誌社一覽		四五四

文芸団体

満洲文芸人名録	四五五―四五八
第三輯 昭和十四年版 (康徳六年十一月十日発行)	四五九―四六六

概観

評論	西村真一郎	二一五
小説概観	青木 實	六一二
詩壇の展望	八木橋雄次郎	一三二―一六
満洲演劇の出発線	絲山 貞家	一七―一九
歌壇概観	武田 勝利	二〇―二七
満洲俳壇展望	金子麒麟草	二八―三四
児童文学の足跡	柳生 昌勝	三五―三七
評論		
最近の満人文学	大内 隆雄	四〇―四三
決算と展望	大内隆雄訳	四四―五一
満人ものに就て	青木 實	五二―五六
芸術と職業	井上 麟二	五七―六四
国策文学論	上野 凌峪	六五―七三
満洲文学雑考	古川哲次郎	七三―七六
満洲文学理論の整理	西村真一郎	七七―八六

詩論 八木橋雄次郎 八七一九一

肉体の悪魔 三好 弘光 九二一九四

日本古典文学に於ける女性描写覚え書 大谷 健夫 九五二〇七

「とりかへばや物語」について 渡辺 栄 一〇八一七

火野葦平論—小説論として— 木崎 龍 一一八一三三

室生犀星の凶 宮井 一郎 一二四一三九

滿洲雜誌論—現地主義の確立のために— 加納 三郎 一四〇一四六

隨筆 沿線人種 秋原 勝二 一四八一五一

日記とカレンダー 紫藤貞一郎 一五二一五六

水野さんの話 三宅 豊子 一五七一五八

随想 木原鏡之助 一五九一六〇

大晦日 大岩 峯吉 一六一一六二

帰郷雜記 加納 三郎 一六三一六七

朝鮮見たまゝ 山崎 元幹 一六八一七〇

競馬と子供 鹿島 鳴秋 一七一七三

暴風雨の前と後 金崎 賢 一七四一七九

哈爾濱の憂鬱 桃北 好澄 一八〇一八二

廃駅・寛城子村の記 加藤 郁哉 一八三二八六

雪だけは頭髮に肩に 石森 延男 一八七二八八

日本鳥瞰図 瀧口 武士 一九〇一九一

建設工事 古川賢一郎 一九二一九三

一輪車 八木橋雄次郎 一九四一九九

棉畑 城 小確 二〇〇二〇一

鴉の裔 高木 恭造 二〇二二〇三

馬の詩 小杉 茂樹 二〇四二〇五

インテリの歌 三好 弘光 二〇六一三〇

解氷期抒情 西原 茂 二二一三三四

雪の朝 落合 郁郎 二二五二二六

やどかり 宮下 秀雄 二二七二三八

燭、厩 太田 正 二二九二三〇

黒豚 小池 亮夫 二三一三三三

窮乏せるアポロ神の歌 井上 麟二 二三四二四〇

蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて 横沢 宏 二四二二四二

廃港 麻港

沙漠の植物 坂井 艶司 二四三二四四

権兵衛和讃 松畑 優人 二四五二四七

五月の風の中で 矢原礼三郎 二四八二五〇

航海船 藤原 定 二五一二五二

短歌 冬雜詠 相川 澤 二五四

身辺 安倍 喬 二五五

白き太陽 新井 重美 二五六

現実 荒川石楠花 二五七

興亜 伊東千鶴子 二五八

土 小川 皓司 二五九

出発 香川 末光 二六〇

聖戦二歳 甲斐 水棹 二六一

垂実 甲斐 雍人 二六二

夏日抄 神山 哲三 二六三

送別 木田 晴夫 二六四

戦傷の友 樺田 正東 二六五

明暗 島田のはぎ 二六六

戦況 鈴木 濟 二六七

哈爾濱 高橋 房男 二六八

春雜 武田 尊市 二六九

南京陥落 津田八重子 二七〇

母逝く 寺本 初音 二七一

事変下吟 富田 充 二七二

楡の林 富永 幸子 二七三

一首一題 中島 新 二七四

金剛山そのほか 西田猪之輔 二七五

無題 橋本 浅夫 二七六

夜の青葉の演奏 平山 斌 二七七

忠霊塔大祭 平山登志夫 二七八

秋冷 三井 実雄 二七九

颯 宮島 正美 二八〇

浅茅ガ原 桃北 好澄 二八一

俳句 伊太利親善使節を滿洲へ迎へて 高山 峻峰 二八四

雜詠 石原 沙人 二八五

軍旅余詠 栗生 純夫 二八六

滿洲四季 森脇 襄治 二八七

四季 志和 斗史 二八八

哈爾濱の憂鬱	III-180	横沢宏	
浅茅ガ原	III-281	『麥の花』感・モンタージュ	
森脇襄治			I-27
柳絮	II-413	麿港	III-241
満洲四季	III-287	横田文子	
		風	III-398
[ヤ]		吉野治夫	
八木橋雄次郎		『麥死なず』を読む	I-32
打たんかな	I-72	手記	II-163
詩壇の展望	III-13	雪子	III-332
詩論	III-87		
一輪車	III-194	[ラ, フ]	
柳生昌勝		林適民	
児童文学の足跡	III-35	決算と展望	III-44
矢原礼三郎		渡辺栄	
寒北断章	II-153	最近の国文学研究思潮につきて	II-81
喪失記	II-154	「とりかへばや物語」について	III-108
五月の風の中で	III-248		
山崎元幹			
朝鮮見たまゝ	III-168		

〈お断わり〉 本書復刻にあたりまして、著作者の御連絡先不明のまま無断掲載させて戴いた作品がございます。御容赦をお願いしますと同時に、著作者または御遺族の方の御一報をお待ち申し上げます。 葦書房

ギルマン・アパート点描	竹内 正一	四〇四―四一七	雑詠三句	三木 朱城	二八九
風	横田 文子	三九八―四〇三	小説	金子麒麟草	二九〇
小さな石	近藤綺十郎	三九四―三九七	同行者	今村 栄治	二九二―三〇三
村会	上野 凌崧	三八七―三九三	蘇へる花束	長谷川 濬	三〇四―三〇九
雪の日	島崎 恭爾	三七九―三八六	生地	北村謙次郎	三二〇―三二六
空しき部落	宍戸貫一郎	三六八―三七八	土龍	鈴木啓佐吉	三二七―三三三
天使は欠伸する	奥 一	三六一―三六七	雪空	牛島 春子	三二四―三三一
窓口	富田 寿	三五五―三六〇	雪子	吉野 治夫	三三二―三四〇
馬家溝	日向 伸夫	三四九―三五四	さち	三宅 豊子	三四一―三四五
馬家溝	福家富士夫	三四六―三四八	馬家溝	三宅 豊子	三四一―三四五
馬家溝	日向 伸夫	三四九―三五四	窓口	富田 寿	三五五―三六〇
馬家溝	奥 一	三六一―三六七	天は欠伸する	奥 一	三六一―三六七
馬家溝	宍戸貫一郎	三六八―三七八	空しき部落	宍戸貫一郎	三六八―三七八
馬家溝	島崎 恭爾	三七九―三八六	雪の日	島崎 恭爾	三七九―三八六
馬家溝	上野 凌崧	三八七―三九三	村会	上野 凌崧	三八七―三九三
馬家溝	近藤綺十郎	三九四―三九七	小さな石	近藤綺十郎	三九四―三九七
馬家溝	横田 文子	三九八―四〇三	風	横田 文子	三九八―四〇三
馬家溝	竹内 正一	四〇四―四一七	ギルマン・アパート点描	竹内 正一	四〇四―四一七
秋の頃	青木 實	四一八―四二六	後記	満洲文芸人名録	四六六―四七八
満洲の胎動	工 清定	四二七―四四三	行事	文化団体一覧	四六六―四七八
アリヨ―シヤ	田兵、大内隆雄訳	四四四―四四七	新聞雑誌一覧	文化団体一覧	四六六―四七八
人造絹糸	小松、大内隆雄訳	四四八―四五五	行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
雑録			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
文化団体一覧			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
新聞雑誌一覧			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
行事			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
満洲文芸人名録			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八
後記			行事	新聞雑誌一覧	四六六―四七八

断章	II-123	死亡室付近	I-103
鴉の裔	III-202	幾山河	II-332
高橋房男		齡	III-355
哈爾濱	III-268	富田充	
高山峻峰		栗原大尉	II-381
俳壇展望	II-20	事変下吟	III-272
氷山	II-403	富永幸子	
伊太利親善使節を満洲へ迎へて	III-284	楡の林	III-273
		[ナ]	
瀧口武士		中島新	
秋	I-60	一首一題	III-274
秋	I-61	永原いね子	
日本鳥瞰図	III-190	北支事変抄	II-397
工 清定		西川清六	
満洲の受胎	II-263	『天才論』批判の序章	II-104
満洲の胎動	III-427	母へ	II-303
竹内節夫		西田猪之輔	
深谷温泉にて	II-427	金剛山そのほか	III-275
竹内正一		西原茂	
友情	I-94	解氷期抒情	III-221
流離	II-365	西村真一郎	
ゲルマン・アパート点描	III-404	植民地文学の再検討	I-20
武田勝利		文芸評論界の概観	II-1
歌壇概観	III-20	東洋の猶太民族	II-59
武田尊一		評論	III-2
春雑	III-269	満洲文学理論の整理	III-77
津田八重子		[ハ]	
南京陥落	III-270	橋本浅夫	
角田時雄		無題	III-276
満洲文学に就て	II-30	橋本八五郎	
寺本初音		喜怒哀楽帳	II-419
母逝く	III-271	長谷川濬	
田兵		蘇へる花束	III-304
アリヨージヤ	III-444		
富田寿			

長谷川四郎		[マ]	
老家行	II-247	町原幸二	
はたち 廿地満		雁の唱歌	I-117
巡礼	II-156	隣一二軒	II-282
幼児	II-157	松畑優人	
窮乏せるアポロ神の歌	III-233	それは私にはわからない	I-68
日向伸夫		鶺鴒	I-69
窓口	III-349	松原一枝	
平山登志夫		紅葉	I-122
忠霊塔大祭	III-278	桔梗の季節	II-320
平山斌		三木朱城	
夜の青葉の演奏	III-277	新京	II-401
ふけ 福家富士夫		雑詠三句	III-289
齒車	I-110	三井実雄	
西喇木倫河	II-223	秋冷	III-279
馬家溝	III-346	宮井一郎	
藤原定		室生犀星の図	III-124
航海船	III-251	宮川靖	
古川賢一郎		炎天	II-296
距離	I-62	三宅豊子	
女友達	I-63	乱菊	I-130
天邪鬼	II-132	水野さんの話	III-157
建設工事	III-192	きち	III-341
古川哲次郎		宮下秀雄	
在満邦人の芸術的立場	I-23	やどかり	III-227
一九三七年満洲文壇の回顧		宮島正美	
	II-75	苦力	II-393
満洲文学雑考	III-73	颯	III-280
古屋重芳		三好弘光	
雨の日断章	I-65	Boiler roomニ住ム黄蝶	I-70
夢の街	I-66	薔薇百科辞典	II-141
七月の愛の歌	II-146	肉体の悪魔	III-92
新緑の夢	II-148	インテリの歌	III-206
		桃北好澄	

大岩峯吉		垂実	III-262	木原鏡之助		三溝沙美	
大晦日	III-161	香川末光		随想	III-159	南嶺	II-399
大内隆雄		年若き僧	II-387	久米幸叢		秋の随筆	II-436
満人の作家たちに就て	I-14	出発	III-260	不毛の地	II-405	穴戸貫一郎	
最近の満人文学	III-40	寛太郎		栗生純夫		空しき部落	III-368
決算と展望(訳)	III-44	鳶の実	II-417	軍旅余詠	III-286	紫藤貞一郎	
アリヨーションヤ(訳)	III-444	鹿島鳴秋		櫻田正東		チェーホフに於ける『絶望』	
人造絹糸(訳)	III-448	競馬と子供	III-171	吾兒	II-395	日記とカレンダー	III-152
大河節夫		加藤郁哉		戦傷の友	III-265	島崎曙海	
当為的と自然的	II-33	廃駅・寛城子村の記	III-183	小池亮夫		ブラゴエチエンスクの空	I-57
太田正		金子麒麟草		葬堂へ	I-46	島崎恭爾	
燭	III-229	月	II-409	湯	II-134	安東	II-326
厩	III-229	満洲俳壇展望	III-28	谷を這ふ	II-135	雪の日	III-379
大谷健夫		雑詠	III-290	上野凌 ^{こうの} 嶮		島田のはぎ	
土地と文学	I-17	金崎賢		満洲文化の文学的基礎	II-52	明暗	III-266
小説界概観	II-5	暴風雨の前と後	III-174	国策文学論	III-65	城 ^{じょうおうず} 小碓	
川端康成論	II-90	金崎利光		小杉茂樹		花筵	I-54
日本古典文学に於ける		満洲文学の特有性	II-47	汽笛	I-48	詩壇回顧	II-10
女性描写覚え書	III-95	加納三郎		棘の葉	I-49	満洲文学の精神	II-25
小川皓司		幻想の文学	II-42	鴉	II-159	蝶の宿	II-130
土	III-259	満洲雑誌論	III-140	道	II-161	棉畑	III-200
奥一		帰郷雑記	III-163	近藤綺十郎		小松	
天使は欠伸する	III-361	神山哲三		胡桃割り	I-50	人造絹糸	III-448
落合郁郎		夏日抄	III-263	手紙	I-51	志和斗史	
新京大同広場にて	I-44	川上旗男		春歌	I-52	四季	III-288
雪の朝	III-225	満洲に於ける“文学”の方向	II-64	地囃	I-52	鈴木啓佐吉	
〔カ〕		木崎龍		小さな石	III-394	泥家	II-240
甲斐水棹		建設の文学	II-38	〔サ〕		土龍	III-317
歌壇の動向	II-11	ある少年の記録	II-231	坂井艶司		鈴木濟	
事変は進む	II-379	火野葦平論	III-118	蟬の歌	II-150	戦況	III-267
山上にて	II-380	木田晴夫		悼歌	II-151	〔夕〕	
聖戦二歳	III-261	送別	III-264	沙漠の植物	III-243	高木恭造	
甲斐雍人		北村謙次郎		佐藤四郎		黄河	II-121
		生地	III-310	満洲文学運動の主流	II-67		

索引

西原和海編

この索引では、執筆者別に、それぞれの作品を検索できるようにした。執筆者名は五十音順に配列し、作品表題は巻数・掲載ページの順に並べた。例えば「I-82」とは、『満洲文芸年鑑 第一輯 昭和十二年版』の82ページを意味する。人名のなかで、特に読みが難しく思われるものにはルビを付した。中国人名は、日本語の音読みに従った。

〔ア〕		石原沙人 (→石原巖徹)	
		奉天	II-407
相川濡		雑詠	III-285
激流渡舟	II-391	石森延男	
冬雑詠	III-254	児童文学追想	II-23
青木實		仕掛花火	II-424
孫の不幸	I-82	雪だけは頭髮に肩に	III-187
一農夫	II-183	伊東千鶴子	
小説概観	III-6	旅順	II-385
満人ものに就て	III-52	興亜	III-258
秋の頃	III-418	絲山貞家	
青山静丘		満洲演劇の出発線	III-17
春聯	II-415	井上麟二	
秋原勝二		水	I-42
雪原	I-90	うを	I-43
夜の話	II-191	戯画	II-125
沿線人種	III-148	猿	II-128
安倍喬		芸術と職業	III-57
身辺	III-255	蝙蝠翔ぶ夕闇に佇みて	III-234
新井重美		今村栄治	
雨と満人	II-389	同行者	III-292
白き太陽	III-256	今村久米子	
荒川石楠花		逃亡	II-287
離心抄	II-383	牛島春子	
現実	III-257	雪空	III-324
石原巖徹		江川三昧	
川柳と満洲	II-429	春耕	II-411

満洲文芸年鑑

第一輯／第三輯／別冊

一九九三年九月十日発行

解説 西原和海

発行人 久本三多

発行所 葦書房有限公司

福岡市中央区赤坂三丁目一番二号
電話 福岡〇九二(七六)二八九五

振替 福岡一三九四三〇

印刷 アロー印刷株式会社

製本

定価はケースに表示しています。

落丁・乱丁本はおとりかえいたします
ISBN4-7512-0510-2